

偽書、偽説の起源

『シオンの賢者のプロトコル』、『ダ・ヴィンチ・コード』を検証する

千葉 紘

序

かつて帝政期ローマで聞こえた「人民の声は神の声」(ヴォクス・ポプリ、ヴォクス・デイ)という、皇帝と大衆の大合唱が二十一世紀の今日、再び鳴り響いているような気がする。刹那的拜金主義者とも形容される時代の寵児を、会計偽装問題が発覚した途端に道徳と倫理が欠落していると平然と批判が飛び交う。日本でも、さらには世界でも世はフェイク(贋物)だらけである。偽装メール、偽装構造計算、東横イン工事偽装、東大科学実験偽造、ES細胞クローン化偽造、BSE検査偽造、CIA情報偽装等々後を絶たないが、「世論の声」も今日の主張が明日は百八十度変わっていくようにとも誰も何とも思わなくなってきた。いるのではないだろうか。この異常な現状を見つめる意味で、今回は、二つの大きなフェイク(贋物)について考えてみたい。一つは現在もその影響が見え隠れする『シオンの賢者の議定書』^{プロトコル}と呼ばれる偽書について、いま一つは日本でも数百万部の売れ行きという小説というより偽説『ダ・ヴィンチ・コード』について考察し、これらの底辺に流れるものを探ってみたい。ノーマン・コーン¹⁾が言うように、(ある者たちがいなく)愚かしい空想について学問的に研究すること、しかもそれに多くの時間とエネルギーを注ぎこむことに、意味があると認めるのはむずかしいかもしれない。しかし読む価値のある本とは、教養ある正気の者がまじめに受けとめることのできるものだけだ、と考えるのはとんでもない間違いだ。なぜなら現実の社会は、贋物や不確かな知識しか持たない狂信者たちによって、思想として偽装された病的な空想が、無知蒙昧な者を対象に大量に生み出されているからである。それが遂には理性的で責任感もある大勢の人びとの魂をうばい、虜にして、思いのままに操るようになる。そのとき人びとは正気を失い、責任も放棄してしまう。そしてあげくのはては、歴史の針路を変え、思いもかけぬ方向に社会を動かすことさえある。ハンナ・アーレント²⁾は『全体主義の起源』のなかでこう述べている。

理解するとは(中略)現実がいかなるものであれ、また(過去に)いかなるものであったにせよ、なにしろ、先入観なしに注意深くそれを直視し、さらにそれに抵抗することを意味する。

Iでは『シオンの賢者の議定書』^{プロトコル}、IIでは『ダ・ヴィンチ・コード』について検証するが、ともに、まさにノーマン・コーン、ハンナ・アーレントの忠告に耳を傾けなくてはならない危険な本である。最後にIIIとして、I、IIに共通に流れる地下水脈について考察したい。なお、敬称は省略し、また参考文献については最後に一括して紹介することにする。

I 『シオンの賢者の議定書』^{プロトコル} 考察

一 日本の持つユダヤ人への偏見について

『シオンの賢者の議定書』^{プロトコル}（以下適宜『プロトコル』という）はユダヤ人陰謀説を述べた本であるが、その前に、日本人のユダヤ人に対する偏見をいくつかの例をあげて考察したい。

(1) 戦争中のマスコミの偏見

第二次大戦中、大新聞は例外なく反ユダヤ主義の記事を載せた。例えば『読売報知』は一九四四年一月二十二日「戦争風邪も猶太謀略」「ペリー提督はユダヤ人で日本侵入の急先鋒だった」と書いている。『朝日新聞』は、同四月二十一日「思想謀略の中には科学謀略がある」として、ユダヤ人の思想を警戒すべきという論説を掲載している。なかでも毎日新聞は「大ドイツ展覧会」「ユダヤと国際秘密結社展」等の企画だけではなく、報道においても、反ユダヤ主義に基づいた戦争論をつねに支持し、一九四三年三月六日には「米国に君臨するユダヤ族」という社説をのせ、七月二十九日にも、ローマの空襲はユダヤ人の陰謀であると、社説で主張している。退役陸軍中将、国会議員四王天延孝しやうてんのふたかの影響も大きいと思われる。なお四王天は「プロトコル」を原訳という形式で出版している。ただ、当時ほとんどの日本人はユダヤ人など誰も見たこともなく、あくまで空想上の概念でしかなかったはずである。ハンナ・アーレントはこう言っている。

ユダヤ人を憎むのにユダヤ人を全く必要としない。これこそが二十世紀の反ユダヤ主義の特徴だ。

この言葉は、今のわれわれにも痛烈に響いてくる。

(2) 文学の偏見の一例

一九八五年芥川賞と新潮新人賞を受賞した米谷ふみ子の『過越しの祭』は、ユダヤ人の夫との間に生まれた障害を持つ子どもをめぐる私小説的作品である。「秀作」と評された一因には、日本人が従来抱いてきたユダヤ人へのステレオタイプの見解を、大いに利用したことがあると言えよう（ただし、英訳では内容を改変しているらしいが）。たとえば、こうである。

・ユダヤ教はキリスト教ほど宣教に重きを置かないが、それでも、自分達の神は万能の神で、他の宗教の神は邪神であると決めつける（一〇五ページ）。

・パス・オーバー・セーダーは聖会であり、儀式である。儀式というものは、知っていないと全く馬鹿に見える。間違いを起すことも許さないかのように見える。逆に、儀式を知っている人々は、如何にも賢しげに見える。又、その知識を誇示して得々と振る舞うのを見るのは鼻持ちならないし、いつも無性に腹立たしくなったものだ（一〇八ページ）。

・（ナチと原爆の被害を比べて）「六百万人が殺されたのと、十三万五千人が殺されたのと、どちらが罪が重いか」
勿論数が多い方が重いかもしれないが、果たしてそれだけのだろうか。考えようがなくなる（一五四ページ）。

・ここに座っている人々は、どうしてわたしが、マリリン・モンローやエリザベス・テイラーのようにユダヤ教に改宗しないのだろうと思っているに違いない。この人々にとっては他宗教は存在しないのだ。こういう排他性がユダヤ教からキリスト教や回教に受け継がれ、その末はお互いに殺し合うようになったのだ。人の主義を黙って放っておけない御節介な西洋。それが植民地主義であり、宣教であり、ナチズムである（一六九ページ）。

・ユダヤ教徒は自分達が神の選民であると豪語し、キリスト教徒は自分達が神の選民であると豪語する。果ては選民が他の選民グループを殺すことになる。西洋人は自分のことを褒めそやす自分が他の人より秀れているのだ、自分のしていることが正しいのだ、だから他の人も同じことをしなければならぬ。そこに何の蟠りわだかまもない（一七一ページ）。

大江健三郎は、この作品は日本人が外国に暮らすときにおかれる状況の真の姿を暴いている、として称賛している。それに対し、フミコ・イケダ・ファインゴールドは次のように述べている。

作家の意図がどうであれ、日本で反ユダヤ主義がもてはやされる風潮のなかにあつて、彼女の作品は最悪の偏見と真実のかけらもないステレオタイプを正当化することはまちがいない。

D・グッドマンによると、ニューヨークの批評家ワカ・ツノダは、この作品は「学校の子どもが書いたような、想像力に欠けた作文にすぎない」と評し、『パブリックシャーズ・ウィークリー』誌は「主人公の自己憐憫と悪意の中傷ばかりが目立つ米谷の物語は、不快な悪口である」と書き、『ハダツサ』誌は「『超越しの祭』はこれまで軽蔑と警告を呼んできたが、この作品にもっともふさわしい対応は、無視することである」と述べているという。これらの見解の相違の根底にあるものは何だろうか。

(3) 宗教者の偏見の一例

一九八〇年代末から九〇年代初頭にかけて、宇野正美という牧師（キリスト教原理主義者）の書いた『ユダヤが解ると世界が見えてくる』、『ユダヤが解ると日本が見えてくる』という二冊の本が話題になった。ここで宇野は、アメリカ合衆国は「ユダヤ国家」で、ユダヤ人の秘密の「影の政府」に操られていると主張している。彼は、ユダヤ人が大銀行、メディア、IBM、ゼネラル・モーターズ、フォード、クライスラー、スタンダード石油、エタソン、AT&Tなどの大企業を操っている、とも主張している。さらにホロコーストなどは存在せずユダヤの陰謀であろう、ヒトラーはドイツ民族のためのドイツを政治目標にしていた、国際的ユダヤ人の陰謀が日本を滅ぼそうと企て、世界経済と政治の動向を操作している、と言う。また、名前が数字に換算できるヘブライ語で、六六六という者が、世界統治者になると（何と新約聖書を引用して）説明もしている。一九八七年四月には、宇野のこの二冊の本の売り上げは計百万部にのぼっていて、マスコミからも大いに注目された。『読売新聞』は、八七年一月十七日、宇野の説は日本がかかえている困難な経済問題の原因を説明することができるものとして扱い、報道していた。また、宇野は自由民主党の保守派によって主催された憲法記念日大会にさえ招かれ、講演している。宇野の著作の中では繰り返し『プロトコル』が引用されている。宇野は、複数ある『シオンの賢者の議定書』の訳本の一つを書いた、永淵一郎の影響が大きいと言われている。宇野を宗教者と位置づけることに問題がないとは言えないが、何よりも百万人以上の人間が読んだとなると、その反響も決して小さいとは言えない。

(4) 最近のジャーナリズム・知識人の偏見

① 九五年月刊誌『マルコポーロ』でホロコーストを否定する特集が生まれ、『マルコポーロ』が廃刊となった（最近、同様にホロコーストを否定する発言をして罪に問われた英国の歴史学者に対し、オーストリアが禁固三年を言い渡した。この被告は八九年、オーストリアで行った講演で「アウシュビッツにガス室は存在しなかった」などと述べていた。『〇六年二月二一日朝日新聞報道』）。

② NHK解説委員、平山健太郎は『エルサレムは誰のものか』の中で、次のように書いている。

民族を意味する西欧の言葉はほとんどが「NATION」だが、語源はラテン語の「NATIONEM」（生まれる）。つまり、そこで生まれた者を指すのが「民族」という概念の出発点だった。しかるに、イスラエルにいるユダヤ人の大部分は欧米からの移住者、いわば「よそ者」ではないかという見方がアラブ人たちの間に強く根づいている。ローマ帝国に国を滅ぼされたあと、二〇〇〇年近くにわたって諸国を流浪したユダヤの民が故郷に戻ったというが、本当にそうなのか。中世に中央アジア（カスピ海北部）に存在した「ハザリア王国」の人々が政治的な動機でユダヤ教に集団改宗したという記録もある。パレスチナから流浪した本来のユダヤ人たちの「血」をまったく引いていない人々が、ユダヤ教の信奉者であるというだけで、パレスチナの土地への「歴史的権利」を主張できるのか。「民族」の定義の重要な要素である共通の「言語」をみても、イスラエルの公用語である「ヘブライ語」は、旧約聖書や祈祷書の言葉をもとにシオニストたちが現代語として作りなおし、イスラエルの移住者たちに教え込んだ「人工的な」言語ではないのか。イスラエル建国以前にアラブ諸国に住んでいたユダヤ教徒たちはアラビア語を使っていたではないか。イスラエルよりはるかに多くのユダヤ人が住むアメリカで、どれほどのユダヤ人がヘブライ語を理解しているのか：等々の議論がそこに重なっている。「よそ者」に土地を奪われたと感じているアラブ人側の心情としては、理解できる議論である（六六ページ）。

二 『プロトコル』の内容・成立の背景

(1) 『プロトコル』の内容

『ユダヤを知る事典』では『プロトコル』について次のように書いている。

『プロトコル』は「ユダヤの長老会議が一〇〇年に一度ブラハのユダヤ人墓地で開催されてきたが、今度から世界シオニスト会議に代わった。実は一八九七年の第一回大会で、大変な秘密決議が採択された」と、いかにももつともらしい口上つきで、ユダヤに世界征服の大陰謀あり、と説いている。

その『プロトコル』だが、第一議定書から始まり、第二十四議定書で終わっている。前述の四王天延孝や永淵一郎の訳本もあ

るが、ここでは久保田栄吉が一九三八年に邦訳したものを基本にして、内容を一部紹介しておく。

第一議定書

人間は皆権力を求めんとして懸命努力する。誰でも出来得さえすれば独裁者たる事を欲する。従つて自己の利益の爲に一般の幸福を犠牲にする事を敢えてしない者は極めて稀である。

われわれの合言葉は権力と偽善である。それ故にわれわれは、われわれの計画の遂行に役立ちさえすれば、暗殺、買収、詐欺、裏切り等に決して尻込みしてはならない。政治上では他を屈服させ、亦権力を獲取するに必要な場合は、猶予なく他人の財産を奪わねばならない。自由・平等・四海同胞なる語は、盲従的なわれわれの謀者によつて世界の隅々にまで宣伝せられ、幾千万の民衆はわれわれの陣営に投じ、比の旗幟（かざ）を擔（か）ぎ廻（ま）つて居る。

第二議定書

われわれの主張を空論なりと思つてはいけない。われわれが仕組んだ所の、ダーウイン、マルクス、ニーチエの教説の徹底的成果に注意なさるがよろしい。

第三議定書

われわれは民衆のために名のみであつて實際でない権利を憲法に挿入した。所謂民権なるものである。民権は空想界のものであつて、決して現実界に持つて来ることは出来ないのである。

第五議定書

国家机关の輪転機はわれわれの手中にある動力によつて運転する。其動力とは即ち金力である。われわれの賢哲の樹立した経済学は王者の権力の資本にあることを明示している。

第七議定書

眞の政治家の言説は、決してその行ふ所と一致してはならぬ。欧州にある非猶太人諸国家を屈服させる為のわれわれの計画を数語に要約すれば、一国一国に対して、われわれの威力を知らしめる為には、暗殺計画即ち恐怖政治、テロを以つてするであろう。しかし万全欧州諸国がわれわれを敵として共同戦線を張る事になった時は、われわれの膨大な金力と巧妙なる誘惑を以つて日本、支那、米國を動かし、之等諸國の大砲がわれわれの名に於いて、其諸國に答えるであろう。

第八議定書

われわれの政府は、あらゆる文明諸國の援軍、即ち社会主義、共産主義、無政府主義等を周圍に集め、其中心に立つて活

動すべきである。そして比の援軍を構成するのは、就中、新聞記者、法律学者、行政官、政治家、それから最後にはわれわれの特殊学校で特殊の予備教育を受けた経済学者や革命家等々の者である。万事は金力で決定される。

第九議定書

妖怪即ち広汎なテロは、われわれ猶太人の手から出て行くのである。われわれは非猶太人の青少年を愚昧にし、誘惑し、墮落せしめた。

諸君はわれわれの世界革命の陰謀に対し、非猶太人が事前に策謀の真相を発見したら、忽ち武器を手にしてわれわれに襲いかかるであろうと言うかも知れない。然しかかる場合に対しては、われわれは恐るべき最後の手段を講じている。この手段たるや如何なる勇者をも戦慄せしめねばおかぬものである。それはやがて世界の全首都には地下鉄が蜘蛛の巣の如くに通ぜられるであろう。われわれはわれわれの危急に際して世界の全首都をその全施設及び文書と共に、比の地下鉄の坑道から爆破してしまうであろう。

第十議定書

われわれは王者の代りに政治の奇形児即ち群集の中から捉え来ったわれわれの手先又は奴隷たる大統領なるものを据えた。是が即ち非猶太国民否全非猶太国民の足下に仕掛けた地雷の基礎である。

第十四議定書

所謂「進歩」したと称する文明諸国にわれわれは、無味乾燥、淫蕩的猥褻な、唾棄すべき文学を創始しておいたが、われわれは比の傾向を世界支配達成後も対照的に尚暫らくは放置しておかなければならぬ。そうすればわれわれの崇高な政治上の政策や言論は著しく目立ってくるのである。

第十五議定書

重大な目的の達成は、手段を選ばず、また血を流させた犠牲の數に拘泥しない時にのみ成功すると、われわれの聖賢哲の言ったのは誠に真理である。人間として猶太人と非猶太人との異なる点は、精神的肉体的に於いて全然天意を異にしている。それはわれわれ猶太人は真の人間として神に選ばれた民族である、と云うことである。われわれの額から崇高なる精神力が光を放っているが、非猶太人は単に動物的智力を有するに過ぎないではないか。

このような内容が、第二十四議定書まで続いている。¹⁰『プロトコル』は日本では昭和初期から繰り返し出版されている。では、

どのような過程を経て『プロトコル』は生まれたのだろうか、成立の背景を調べてみたい。

(2) 『プロトコル』成立の背景

『プロトコル』の一部は、ロシアではイリヤ・ツイオン、フランスではエリ・ド・シオン¹¹の名で知られた生理学者兼ジャーナリストによって作られたというのが定説である。ただ、ド・シオン自身ユダヤ系であり、改宗したとはいえ、一度もユダヤ人攻撃を行ったことがない。さらに彼は、真面目で教養ある人士で、このように低劣な反ユダヤ文書の捏造に手を染めるとは考え難い。さらに下地が存在すると考えられる。

現在では、下地は、もともと風刺という意味でモーリス・ジヨリというフランスの法律家¹²が書いたと考えられている。彼はナポレオン三世の政治的野望を嘲弄しようとし、表題は、『マキアヴェリとモンテスキューの地獄での対話、あるいは当代理一九世紀におけるマキアヴェリの政略』という。この作品は一級品と言われる¹²。それをド・シオンが当時のロシア大蔵大臣セルゲイ・ウイツテを標的にした文章に書き換えた。それをさらに、ロシア帝国秘密警察―悪名高いオフラナーの海外情報活動の中心人物でパリ支局長ビョートル・イワノビッチ・ラチコフスキーがセルゲイ・ニルスといういかかわしい人物を通して、『シオンの賢者の議定書』に書き換えたというのが、有力な説だと思われる。N・コーンによると『プロトコル』が作成された年は一八九四年から九九年の間、それもおそらく一八九七年か九八年のいずれかで、フランスの内政問題に多くのページを割いていることから見て、作成されたのはフランス国内。場所はパリ。かなりの確度で断言できると彼は言う。偽書の作成は、フランスの国論が二分されて沸騰していたドレフェス事件のさなか、ドレフェス大尉の逮捕（一八九四年）までの間、ということになる。しかし、いくつかの点は謎のままだし、おそらく永久に謎のままであると思われる。

(『プロトコル』成立経緯の推測)

モーリス・ジヨリ¹³によるナポレオン三世の風刺

← ド・シオンがロシア大蔵大臣批判の文章に書き換え



ロシア語版の表紙

←
ラチコフスキーの指示によってニルスが書き換えて『プロトコル』を作る

だが、『プロトコル』成立の背景は、ハンナ・アーレントの次の言葉で十二分である。

経験的裏付けを欠いたユダヤ人憎悪―「ユダヤ人を憎むのにユダヤ人を全く必要としない」というユダヤ人憎悪―が生まれるのだが、これこそが二〇世紀の反ユダヤ主義の特徴だ。

最も重要なことは、この偽書がどのように世界に広まり、どのように利用されたかということである。

(3) 偽書『プロトコル』の「利用」と背景

われわれは、『プロトコル』は一〇〇人の読者に一〇〇通りの解釈を許すという性質の書物であることに注意する必要がある。また一九世紀末から二〇世紀初頭の、特にフランス、ドイツ、ロシアを巡る状況にも注意しなくてはならない。ハンナ・アーレントは次のように言っている。

社交界でユダヤ人はちやほやされた。ユダヤ的であるということは一種の悖徳はいとくと見られたからである。犯罪には刑罰が加えられるのだが、悖徳というものを抑えようとすれば絶滅が必要となってくる。こうして、ユダヤ人であるということについての社交界の解釈と、ついに反ユダヤ人措置が断行されたときの恐るべき徹底さ、具体的には、ナチの絶滅収容所などとの間には、関連が生ずるのである。

(そして、反ユダヤ主義が断行され始めたとき) 社会の比較的上層のすべての部分は、自分を潔白に見せるためにユダヤ人を犠牲にしてもいいと考えはじめた。生活を破壊されたモツプムツプが彼らの不満をユダヤ人に向けたとき、「ユダヤ人を殺せ！」の声はモツプを決起させ、社会の上層部はこの声を既成の社会の維持に役立つものだと見なしたのである。

われわれは、これを過去のこととは断じられない。ここで、歴史的な面に焦点を当ててみると、ユダヤ人の世界支配陰謀の神話の発祥はフランス革命に溯り、その先鞭をつけたのはフランスのイエズス会士バリユエル神父である。一七九七年バリユエルは全五巻の大著『ジャコバン主義の歴史に関する覚書』によって、フランス革命秘密結社陰謀説を開陳している。イエズス会に

よると、「イタリアはユダヤ人のせいで暴力と不道徳性と救いのない混沌の中に落ち込んでいゝ」と会報に書き、「近代のあらゆる凶事―フランス革命からごく最近のイタリア企業破産に至るまで―はユダヤ人二〇〇〇年の陰謀にその責を帰すべきものである」と述べた。また、一九世紀末フランス国内では、フリーメーソンまたはユダヤ人またはその両方による悪魔的陰謀というテーマでの多くの煽情的な文書を生み出した。このプロパガンダは、田舎司祭、それも農民出身で教養にやや欠けるところがあり、思い込みの激しいタイプの中にとりわけの支持層を見出すことになった。

ハンナ・アーレントは「ヒトラーのプロパガンダは、フランスがずっと前から聞き慣れていた言葉であった」と語っている。一方、ロシアではユダヤ人の世界支配陰謀説が、政府当局の手で積極的に流布され、このプロパガンダが政府警察の日常的工作であったことがフランス、ドイツと異なる特徴である。『プロトコル』にロシア帝国秘密警察―オフラナーが深く関与していることを明るみに引き出したことが、後のベルン裁判の最大の歴史的意義であろう。

次に、ナチ・ドイツでの利用のされ方に目を投じたい。

ハンナ・アーレントは『全体主義の起源』の中でこう語っている。

ナチは陰謀のフィクションからスタートし、多少とも意識的にシオンの賢者の秘密結社の組織原理を模倣して自己形成した。

ヒトラーの著書『我が闘争』^{アイン・カンフ}の大部分は、ユダヤ人が世界支配のために弄する謀略に関する暴露的な長広舌に割かれている。これによると、ユダヤ人はフリーメーソンの手を借りて支配者階級を操り、マスコミを通じて下層階級を愚民化していると述べ、次のように語っている。

ユダヤ人がみなどれほど嘘つきかということは、ユダヤ人が憎んでやまぬ、あの『シオンの賢者のプロトコル』に明らかである。いくら『フランクフルト新聞』が『プロトコル』は偽書だと書き立てても無駄なことである。こういい立てること自体『プロトコル』が本物であることの動かぬ証拠だ。多くのユダヤ人が無意識に行っている行動が、ここでは意識的に明示されている。どのユダヤ頭がこの暴露話の張本人かなどという詮索に意味はない。肝心なのはこの『プロトコル』がユダヤ人の本性と活動を完膚なきまでに明らかにし、内的論理と最終目標を位置づけてみせたことである。現実が最良の注解を提供する。過去一〇〇年の歴史の展開をこの本の視点から考察すれば、ユダヤ系の新聞の大騒ぎもうなずける。我が国民全

員がこの本を熟読した暁には、ユダヤの脅威は征圧されたも同様であろう。

ドイツ国民社会主義労働者党の御用哲学者・人種差別理論家で香具師アルフレード・ローゼンベルグも宣布に大いに関与した人物である。また、ヘルマン・ラウスヒニングとの対話『ヒトラーは語る』では、こういうやり取りも書かれている。

(ラウスヒニング)「だが、『プロトコル』は明らかに偽書である。とても本物とは思えない」
 (ヒトラー)「それがどうした？ 歴史的に真実かどうかなどはどうでもよい。内容的に真実であれば体裁など論ずるに足らん」

ロシアのユダヤ人虐殺時代に捏造されたこの荒唐無稽な偽書の中に、ヒトラーは自分の魂に触れる叫び声を聞き取ったと思われる。ナチが外国でのプロパガンダのために利用したのは『プロトコル』だけであった。『プロトコル』とユダヤ人の世界的陰謀の神話は、ナチによって、結党から一九四五年の瓦壊までの全盛期、徹底的に利用し尽くされた。最初は政権の座によじ昇るために、次いでその恐怖政治を正当化し、戦争を正当化し、民族皆殺しを正当化するために、そして最後は降伏の受諾を遅延させるために、常に口実に使われたのがこの神話であった。ただ、これはナチの一部の人間の所業と断定することは間違っている。ハンナ・アーレントは言う。

ナチ・ドイツの降伏後、連合国側はドイツ住民の中から一人でも確信的なナチを探そうと無駄骨を折ったが、このことはドイツ民族の八〇パーセントまでがかつて一度はナチの心からの信奉者もしくは共感者だったことがあるという事実と矛盾はしない。

大衆が常識とその判断力を徹底的に消滅し、また人間に最も基本的な自己保存本能がそれに劣らず、徹底的に働かなくなっていたと言えよう。そしてこれは決して過ぎ去った歴史的なことではなく、いつでも起こりうる現象である。

一九六一年のエルサレム裁判の場(人種根絶の執行者であった)アドルフ・アイヒマンは、ヒトラーその人こそ《西側世界の資本家たちの悪魔的インターナショナル》―神秘的で、不可視で、至るところにその触手を伸ばしているあのシオンの賢者たち―の手先であり、操り人形なのだと宣言するに至ったのであると語っている。そのアイヒマンをハンナ・アーレントは次のよ

うに語っている。

(アイヒマンは) 愚かではなかった。完全な無思想—これは愚かさとは決して同じではない—それが彼があの時代の最大の犯罪者の一人になる素因だったのだ。このことが〈陳腐〉であり、そののみか滑稽であるとしても、またいかに努力してみてもアイヒマンから悪魔的な底の知れなさを引き出すことは不可能だとしても、これは決してありふれたことではない。

(アイヒマンには) 考える力—つまり誰か他の人の立場に立って考える能力—の不足が特徴的だった。

アイヒマンという人物の厄介なところはまさに、実に多くの人々が彼に似ていたし、しかもその多くの者が倒錯してもいざサディストでもなく、恐ろしいほどノーマルだったし、今でもノーマルであるということなのだ。われわれの法律制度とわれわれの道徳的判断基準から見れば、この正常性はすべての残虐行為を一緒にしたよりもわれわれをはるかに慄然とさせる。

(アイヒマンは) 愚か者ではないのだが、自発的に行う行動は上司から受け取った指示の範囲内に限られる。

アイヒマンは裁判で「自分は義務を行った。命令に従っただけでなく、法律にも従った」と証言している。悪しき官僚制に繋がるこの言葉と、ハンナ・アーレントの指摘は、現代のわれわれに強く訴えるものがある。アイヒマンは決して過去の人物ではないと。

次に若干、アメリカと日本での『プロトコル』の「利用」について触れておく。

ユダヤ人ラビ・M・トケイヤーはその著書の中で、病的な反ユダヤ主義者であったフォード創始者のヘンリー・フォード（ヒトラーはこのお気に入りのアメリカの実業家をハイブリック・フォードと呼んでいた）や、後のジョン・ケネディ大統領の父親であり、やはり熱心な反ユダヤ主義者で富豪だったジョセフ・ケネディとともに、デトロイトのカトリック、チャールズ・コグリン神父のことを述べている。

コグリン神父は、毎週一回、全米向けのラジオでトーク番組を持って、ユダヤ人を排撃すべきことをさかんに訴えた。神父はデマゴーグ—嘘を並べるのが得意な、民衆煽動家であり、ユダヤ人が世界を征服する秘密計画を持っているという『シオンの議定書』が、真実のものと説いた。

この『シオンの議定書』は十九世紀に、帝政ロシアの秘密警察が捏造したものである。

一九三八年十一月十日、ナチ・ドイツにおいてドイツ官憲が全国にわたって、ユダヤ人を襲撃した「クリスタルナハト」(ガラスが飛散した夜)が起こった。コグリン神父はその十日後のトーク番組で、ナチの宣伝文書を根拠に用いて、ユダヤ人は「その悪行に対する、当然の報いをえただけだ」と、いった。ドイツでは「クリスタルナハト」によって、まず手始めに二万人の無辜のユダヤ人が、強制収容所へ送られた。

私が幼かったころ、両親は外出することを、恐れていた。

とくに、コグリン神父のラジオ番組があった日は、そうだった。一九四二年までは、反ユダヤ主義に染まった暴漢たちが、ユダヤ人商店や、ユダヤ人の住居にいかかわしい文言を落書きをしたり、反ユダヤ主義のステッカーを貼ったりした。彼らはヨーロッパのキリスト教徒の末裔だった。

ユダヤ人など生まれてから一度も見ないような人々の住むバイブルベルト―特にカンサスあたり―で反ユダヤ主義は激烈な支持を受けた。R・ホーフスタッターはその著書の中で「(当時のアメリカの)反知性主義は、反ユダヤ主義だった」と指摘している。

一方、現代の日本では、前述の宇野らを先頭にユダヤが世界経済を牛耳っていると、背後で抗争を操っていると、戦争・不景気・日本の円高円安・エイズ等々、すべてがユダヤの陰謀で片づける人間がいる。片方にその時その時の現象、もう一方にユダヤの陰謀を対置して結びつけただけ、因果関係は一切説明されないのを特徴とする。そこにはユダヤ人が金持ちであり、知力にすぐれアメリカの政財界を支配している、といった一種の歪んだ畏敬心がまじり合っている気さえしてならない。

これまで述べてきた『プロトコル』について、内田樹は駄本としながら、次のように言っている。

『プロトコル』を偽書と知ってこれを商売にしている者たちがもう一方にいる。この人たちが売っているのは情報ではない。精神安定剤である。

さらに彼は言う。

私たちは何度でも繰返し『プロトコル』の有害性を指摘し続けてゆかねばならない。無稽で有害なものに淫する者で私たちはある限り。

『シオンの賢者のプロトコル』は有害な偽書であるということを書べてきた。今から一〇〇年以上前に現れた危険な駄本が、信じ難いほど悪用されてきた。これと同じように陳腐だが危険な本が世界的なベストセラーになっている。『ダ・ヴィンチ・コード』である。

II 『ダ・ヴィンチ・コード』考察

日本でも数百万部の売れ行きというこの小説、映画化もされた。あくまで小説でしかないのだが、言葉は信じられないほどの暗示効果がある分だけ、フィクションだからといって無視できないものがある。売ればいいだけでなく、小説であっても書いていることと、そうでないことがあるはずである。ましてや、著者ダン・ブラウンは冒頭で「この小説における芸術作品、建築物、文書、秘密儀式に関する記述は、すべて事実に基づいている」と断言して始めているのである。これから『ダ・ヴィンチ・コード』について、宗教史、美術史、画像学、歴史等々諸方面からこの小説ではなく偽説を取り上げ、そこに孕む危険性を表面化してみたい。その前に、最小限のあらすじを最初に紹介しておく。

一 『ダ・ヴィンチ・コード』簡単なあらすじ

主な登場人物は

- ① ロバート・ラングドン（ハーヴァード大教授）
- ② ソフィー・ヌヴー（フランス司法警察暗号解読官、ルーヴル美術館館長ソニエールの孫娘）
- ③ リー・ティーピング（イギリス人宗教史学者）
- ④ マヌエル・アリンガローサ（カトリックの一派オプス・デイの代表 司教）
- ⑤ シラス（オプス・デイの色素欠乏症の修道僧）

ルーヴル美術館館長ジャック・ソニエールが館内で殺害され死体となって発見された。殺害当夜、館長と会う約束をしていたハーヴァード大教授ラングドンは、フランス警察より捜査協力を求められる。ソニエールの死体は、グラランド・ギャラリーでダ・ヴィンチの最も有名な素描『ウィトルウィウスの人体図』を模した形で横たわっており、さらに、死体の回りには、複雑怪奇な

ダイイングメッセージが残されていた。館長の孫娘でもあり、現場に駆けつけてきた暗号解読官ソフィーは、一目で祖父が自分だけに分かる暗号を残していることに気付く。ソニエールが死の直前に残したメッセージには、ラングドンの名前が含まれていた。彼は捜査協力ではなく第一容疑者として現場へ連れてこられた。

ソフィーの機知により苦境を脱したラングドンは、彼女が祖父の残した暗号を解く手助けをすることになる。二人はフィボナッチ数列、アナグラム：数々の象徴の群れに紛れたメッセージを解き進む。そして、ソニエールが秘密結社プリウレ・ド・シオン・シオン修道会の総長だったことが判明する。シオン修道会の歴代総長の中には、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ボッティチエリ、アイザック・ニュートン、ヴィクトル・ユゴー、ジャン・コクトーらがいたという。シオン修道会は一〇九九年、十字軍の指揮官だったゴドフロア・ド・ブイヨンというフランス人によって、エルサレムを征服してまもなくそこに創設された。それは女神崇拜とイエスの血脈の真実を守り伝えるための秘密組織であった。シオン修道会はイエスの真実の証とされる秘密文書を、厳格な規律のもとに、現在まで密かに保管してきた。巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチが、英知の限りを尽くして暗号を描き込んだ絵画〈最後の晩餐〉だった。

マグダラのマリアとイエスが結婚し、子どもがいたということをついに封印しようとするカトリック教会の世界的陰謀。『神の子』というイエスの地位は、ニケーア公会議で正式に提案され、投票で決まったという。この公会議で、キリスト教のさまざまな点が議論され、票決が行われた。復活祭の日付、司教の役割、秘蹟の授与、そして言うまでもなく、イエスを神とすることがどうかについて等々ブラウンは語る。当時の社会秩序は、男性が結婚しないことを事実上禁じていた。もしイエスが結婚しなかったのなら、福音書のどれかがそれに言及し、独身という不自然な状態を通じた理由についてなんらかの説明をしているはずで、ところがそんな記述はどこにもないという。結婚については『フィリポによる福音書』に書かれているとブラウンは言う。またそれは『マグダラのマリアの福音書』にもあるという。マグダラのマリアが有力な一族の出であった証拠を消すために、娼婦ということにされた。その伴侶たるキリストはソロモン王―ユダヤ人の王の末裔―王家の血が流れていた。イエス・キリストは結婚していたばかりか、父親でもあった。マグダラのマリアは聖なる器で、イエス・キリストの血脈を育んだ杯だったことをヴァチカンに聞かせるとうとした。それが十字軍の任務のひとつでもあったという。イエスの血脈はフランスでひそかに受け継がれ、やがて五世紀に大胆な動きを示した。フランス王家と姻戚関係を結び、メロヴィング朝の王統を創始した。そして、今日のシオン修道会は重大な義務を負っている。秘密文書を守ること、マグダラのマリアの墓を守ること、そして、キリストの血脈、すなわちいまも生き延びているメロヴィング王家の後裔を守ることが義務としてしている…。

およそ二四時間の間に起こるフィクションであるが、ダン・ブラウンはインタビューでマゲダラの MARIA や、その他諸説を二年の取材の結果、信じていると答えている。

読む本は友人と同様、慎重に選ぶべきである。なぜなら、人間の習慣や性格に大きく影響するからとパクストン・フッドは言っている。数百万人に影響を与えたとすると、小説なのだからでは済まされなくなる。この嘘にまみれた小説というより偽説のいくつかを明らかにしておかなくてはならないと考え、以下、順次それを炙り出していきたい。

二 『ダ・ヴィンチ・コード』の虚言の数々

前述のようにダン・ブラウンは冒頭で「事実」とした上で

シオン修道会は、一〇九九年に設立されたヨーロッパの秘密結社であり、実在する組織である。一九七五年、パリのフランス国立図書館が「秘密文書」として知られる史料を発見し、シオン修道会の会員多数の名が明らかになった。そこには、サー・アイザック・ニュートン、ボッティチェリ、ヴィクトル・ユゴー、そしてレオナルド・ダ・ヴィンチらの名が含まれている。(中略) この小説における芸術作品、建築物、文書、秘密儀式に関する記述は、すべて事実に基づいている。

から始めている。ダン・ブラウンがいかに浅薄な知識しか持たないかを、初めに図像学、美術史の観点から説明しよう。

(1) レオナルド・ダ・ヴィンチの作品の説明箇所の検証

個々の浅薄な知識を述べる前に、レオナルド・ダ・ヴィンチは古典主義形式にしたがって作品を作成したことに注意しなくてはならない。古典主義の形式的な特徴を、若桑みどりは次のように語る。

まず簡潔であること。最小限の要素で、もっとも簡潔、単純な完璧さを追求する。第二に、自然らしさ、真実らしさを保つこと。第三が、全体として均衡と比例がととのっていること。第四に、主題がもっとも適切な形式によって正確に伝達されていること。一口にいえば、古典様式の特徴は「バランス」ということである。

さらに若桑は、レオナルド・ダ・ヴィンチが無神論者だったという。彼が『モナ・リザ』（と後に呼ばれるようになった作品）に描いたのは、神のいない宇宙観であった。これを言語でいつていたら、生きていられない時代であった。当時の人々はそこに何が秘められているのかを正しく読み取ったと若桑はいう。さらにレオナルド・ダ・ヴィンチは、目に見えた事実こそむかぬように、「真実らしさ」というものに非常に誠実であったばかりでなく、主題のもつ思想的な、また精神的な真実、つまりはことごらの本質を描き出そうとした画家であったと述べている。

① 『岩窟の聖母』についての検証

ダン・ブラウンは『ダ・ヴィンチ・コード』（上）一九四ページで次のように説明している。

その絵には、青い外衣をまとった聖母マリアが、イエスとおぼしき幼子を腕に抱く姿が描かれていた。マリアの向かいにウリエルが座し、そのそばにもうひとり子供がいるが、こちらは洗礼者ヨハネだと思われる。ふつうはイエスがヨハネに祝福を与えるものだが、奇妙なことに、ここではヨハネのほうがイエスに祝福を与え、しかもイエスはそれを押し込んでいる。さらに問題なのは、マリアが幼いヨハネの頭上に片手をかざして、どう見ても威嚇の姿勢を示している点だ。ワシの鉤爪のようなマリアの指が、目に見えぬ頭を握っている。そして最も恐ろしいのは、マリアの曲がった指の真下で、ウリエルが手で何かを切るしぐさ。マリアの鉤爪につかまれた目に見えぬ頭部を、喉もとあたりで掻き切るしぐさである。

この作品はイエスは神の子、天の子でありながら、だれよりも低く座り、究極の謙遜を表すという伝統的図像学に基づいた作品



『岩窟の聖母』（ルーヴル所蔵版）



である。聖母マリアは、地に膝をついている子どもの肩に手を置いている。だが、この子どもはブラウンの言うイエスではなく、洗礼者ヨハネである。この絵に奇妙なところは何も無い。

ダン・ブラウンはイエスとヨハネの位置を間違えという浅薄な認識をベースにしてとうとうと弁ずるといふ愚かさを露呈している。したがって、マリアの指を「ワシの鉤爪」のようだと表現しているのはまったく話にならない愚かさの露呈である。なお、この作品は約一八〇センチの高さの絵画である。ソフィーが自由に揺さぶったという箇所が『ダ・ヴィンチ・コード』(上)一八四ページにあるが、一人の人間が動かせる重さではないことを付け加えておこう。

② 『モナ・リザ』についての検証

『ダ・ヴィンチ・コード』(上)一七〇ページでハーヴァード大教授の口から次のようなことを言わせている。

『モナ・リザ』は男とも女ともつかない顔をしているうえに、名前も男女の神を合わせて並べ替えたものです。それこそがダ・ヴィンチのやさやかな秘密であり、ヘモナ・リザンがわけ知り顔の微笑を浮かべている理由なんですよ。

ダン・ブラウンはリサーチに二年をかけたというが、基本的なことを見落としている。ダ・ヴィンチは、自分の絵画に題名をつけたことがないのである。ダ・ヴィンチは一つも自分の絵画に名前をつけないまま、一五一九年に他界したのである。『モナ・リザ』と呼ぶ根拠はどこにあるかという点、ジョルジョ・ヴァザーリ(という嘘つきと定評の人物)が、そのころレオナルドはフィレンツェの市民ジョコンドの妻、モンナ・リザを描いたといったのが



『イザベッラ・デステ』



唯一の根拠である。ほかには証拠が全然ないので、一応これを信じて人びとは伝説を組み立てたが、ではなぜジョコンドの家に納めなかったのか等の疑問が出たままである。モデルは、横顔からマントヴァの公爵の妃であるイザベッラ・デステだという学者もいる。一方、彼の自画像にそっくりだという説も根強い。

いずれにせよ、ダ・ヴィンチがモナ・リザと名前をつけ、それが秘密を表しているという前提は脆くも崩れ落ちる。

③ 『最後の晩餐』についての検証

(i) 技法についての検証

基本的にダ・ヴィンチは作品の制作が非常に遅かった。仕事のおそい人は、フレスコ技法は絶対にむかない。当時の壁画技法は、下地の漆喰が生乾きのうちに素早く顔料を染み込ませる、フレスコ画法が一般的だったが、熟考しつつ筆を進めたダ・ヴィンチは、乾いた下地に一種のテンペラ絵の具を用いた（この試みが失敗し、やがて絵の具層のひび割れ、剥落が始まり、完成からわずか二十年後、「壁の湿気のためか他の不都合のためか、すでに破損し始めている」との、観察者の記録が残されている）。

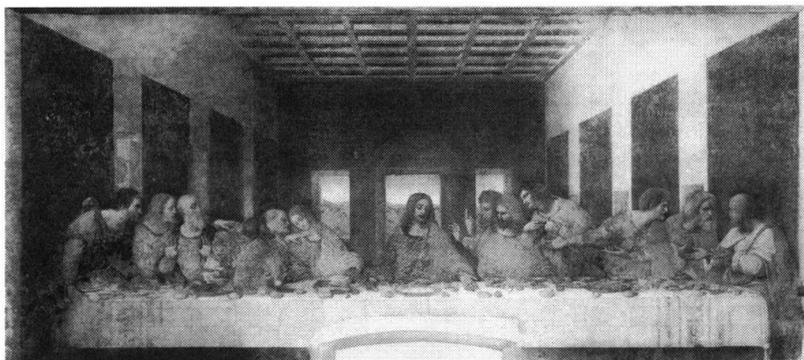
これが常識なのに、『ダ・ヴィンチ・コード』（上）三三三～三三四ページでは

「このフレスコ画には、聖杯の謎を解く鍵がすべてそろっている。ダ・ヴィンチは〈最後の晩餐〉に手がかりをはっきりと残したわけだ（中略）」このフレスコ画が、聖杯とは何かという質問に答えてくれるのね？」

と言わせている。フレスコ画とテンペラ画という、まったく異なる性質の技法すらこのハーヴァード大学教授はご存知ではないことが露呈している。長い間、テンペラ画に携って来た私には、啞然とする断定である。

(ii) 構図の解釈の検証

ダ・ヴィンチはラングドンとティーピングの口を借りて、次々と解釈を披露してい



最後の晩餐（原画）

く。次に構図に関して三箇所だけ取り上げてみる。

(ア) 『ダ・ヴィンチ・コード』(上) 三三三～三三四ページ。

「このフレスコ画には、聖杯の謎を解く鍵がすべてそろっている。ダ・ヴィンチは《最後の晩餐》に手がかりをはっきりと残したわけだ(中略)」

「このフレスコ画が、聖杯とは何かという質問に答えてくれるのね?」

「何かではない。(中略) だれかだ。聖杯は物ではない。実を言うと、聖杯は(中略)人(マグダラのマリア)なのだよ」

(イ) 『ダ・ヴィンチ・コード』(下) 二〇ページ。

ペテロが脅しつけるような様子でマグダラのマリアに迫り、刃の形にした手を首へ突きつけている。

(ウ) 『ダ・ヴィンチ・コード』(下) 二〇ページ。

手の数をかぞえてみれば、これがだれの手でもないのがわかるだろう。体がないんだよ。謎の手だ。

(ア)について

相変わらずダン・ブラウンは、自分の信念から生まれ出た嘘の物語を気前よく広めている。ここまで書いて思わずR・ブロンフィールドのエッグヘッドの定義を読み返した。彼はこう定義している。

《エッグヘッド》見せかけの知的振る舞いをする人。

何よりも浅薄。あらゆる問題に感情過多で高慢。自らを過信し、より健全で有能な人物の経験に対する軽蔑心に満ちている。思想が基本的に混乱していて、感情と混同した福音主義



CGで復元された「最後の晩餐」(CG:NHK)

(絵に向かって) イエスの左が聖ヨハネ、その横が聖ペテロ(ナイフを持っている)、その左で見上げているのがイスカリオテのユダ

に埋没している。

ダン・ブラウンはイエスの右にるのがマグダラのマリアだという。聖書の記述や伝承によれば、キリストの最愛の弟子、聖ヨハネは、イエスが死んだとき、思春期を過ぎたばかりだった。ダ・ヴィンチは、聖ヨハネを伝統的な決まりと当時の法則にのっとって描いている。髭のない顔、きゃしゃな手、少年はあくまでも少年であり、女性と見ることはできない。男女の判別がはっきりしないのは、ダ・ヴィンチの作品の大きな特徴である。フロイトは、ダ・ヴィンチの出生以来の心理的傷跡といっている。

(イ)について

ペテロの左手は、実際には聖ヨハネの注意を引いた後で、キリストを指している。聖ヨハネはペテロに耳を近づけ、だれのことを言っているのかイエスに聞けというささやきを聞いている。その様子をユダは険しい目つきで観察し、財布をしっかりと握り締めたまま会話を聞いている。

(ウ)について

ユダの肩の下に出ているのは、聖ペテロの右手で、剣を持っている（後に大祭司の手下のマルコスの耳を切り落とすことになる剣）。ブラウンにしてみれば、短剣を持っているのは「謎の手」らしいが、よく絵を見れば謎でもなんでもないことは明らか。また、余分な手など存在しない。イエスの左側にいるのは六人で、描かれている手は当然一二本である。

この絵に向かって、右側には、弟子たちが二組に分かれている。三人はだれが裏切り者かと話し、別の三人はイエスのほうを向き、だれなのかと聞いているような動作で迫っている。そのなかのひとり自分が自分を指差して聞くのだ。「主よ、まさかわたしのことでは」（マタイによる福音書二六章二三節）。イエスの左側には、他の六人の弟子たちがいて、受難の物語で重要な位置を占める三人（聖ヨハネ、聖ペテロ、裏切り者ユダ）がイエスの近くに座っている。他の三人は恐れに満ちた表情で何やら手振りしている。この極度に緊張した場面を描いたのがこの作品である。

ダ・ヴィンチが無神論者だったと述べたが、彼は死期が迫ると、敬虔な（カトリック）信者としての遺言状を残し、神の審判を受けなければならないことを悟り、それまでの人生を清算することを望んだことを付記しておく。

『ダ・ヴィンチ・コード』は、ティーピングとラングドンの口から、通説を根底から覆す主張が一方的に語られるばかりで、他の登場人物には反証の余地が一切与えられていないという特徴を持つ。これは小説でありフィクションであると知りながらも、嘘にまみれた主張にさらされるのである。これが『ダ・ヴィンチ・コード』が持つ最大の危険性である。次に、歴史特に宗教史、キリスト教史の観点からその虚言を検証してみる。

(2) 宗教史、キリスト教の観点からの検証

巨大なオンラインショップ・アマゾンに投稿されている読者のレビュー欄を読むと、『ダ・ヴィンチ・コード』が（知らず知らずに）多くの波紋を投げかけているのが分かる。人間の頭脳は活字になったものを疑うよりも信じるほうが強く働くのかも知れない。ダン・ブラウンが「事実」と冒頭で述べていることもその原因の一つであろう。ここでは、ダン・ブラウンの「知識」を宗教史的観点等から六箇所を取り上げて検証してみたい。

① ニケーア公会議についての検証

『ダ・ヴィンチ・コード』(上) 三二九ページでニケーア公会議について次のように言わせている。

「そうだ。『神の子』というイエスの地位は、ニケーア公会議で正式に提案され、投票で決まったものだ。」
 「ちょっと待って。投票の結果、イエスが神になったの?」「かなりの接戦だったがね」

ニケーア公会議は会議のはじめにアリウスからキリストの神性を否定する信条草案が出されたが直ちに否決され、つづいてエウセビオスから提出されたカイザリアで使用の信条をめぐって議論が沸騰した。アタナシオスは、子は父と全く「同質」(ホモウシオス Homousios) であると主張、アリウスの、子は父より低い存在で「異質」(ヘテロウシオス Heterousios) であるとの主張と激しく論争が行われ、最終的にはエウセビオスの提案に「同質」の言葉を挿入して訂正し、ここに「ニケーア信条」(Symbolum Nicaenum) が成立したのである。正統キリスト教徒も異端者(と呼ばれた人たち)もイエスは神の子であるという点では一致していたのであり、ダン・ブラウンはここでも事実を混同していることになる。

なお、三〇〇名を超える出席者のうち、ニケーア信条の採択に反対したのは、二人の司教²⁰だけだった(公会議は彼らを免職のうえ破門し、コンスタンティヌス帝は二人を追放した)。

② イエスが結婚していたことについての検証

『ダ・ヴィンチ・コード』(下) 一六ページで、ハーヴァード大学教授ラングドンの口からこう言わせている。

「当時の社会秩序は、男性が結婚しないことを事実上禁じていたんだ」

ユダヤ人は、したがってイエスは常に律法を重んじていた。ラングドンの主張が本当だとしたら、独身を禁じる律法があるはずだが、それはどこにも存在しない。たとえば預言者エレミアは、神に命令されたとおり、妻をめとめることはなかった。²¹ユダヤ人の大部分が既婚だから、イエスも結婚していたと考えるほうが「理にかなっている」というラングドン教授の論法こそ「理にかなっていない」。

③ 聖書の引用についての検証

『ダ・ヴィンチ・コード』(上) 二三四ページで

「ノアが色素欠乏症だったのを知らないかね」

と驚くべきことに敬虔なカトリック司教アリンガローサに言わせている。旧約聖書でノアの肌の色に触れているところはない。それは有名なグノーシス主義の書物である「エノク書」²²の記述(一〇六章二節)にある。カトリック司教にこんなことを言わせるという設定があまりにもお粗末である。

④ (マグダラの)「マリアによる福音書」の引用についての検証

『ダ・ヴィンチ・コード』(下) 一八ページで

マグダラのマリアのことばで語られた福音書が存在することなど、ソフィーは知らなかった。そこにはこう書かれていた。

そしてペテロは言った。「わたしたちの知らないところで、ほんとうに主は彼女と語り合っていたらいいのよ。わたしたちは態度を改め、こぞって彼女のことに耳を傾けるべきなのか。主はわたしたちよりも彼女を気に入っておら

れるのか」

レヴィは答えた。「ペテロよ、あなたはいつも激しやすい。かの女性を敵のごとく見なして張り合っているのが見てとれる。もし主が彼女を尊ぶべきとなさるならそれを拒むあなたはいったい何者か。主はまちがいに彼女を知りつくしている。だからこそ、わたしたちよりも彼女を愛したのだ」

「ふたりの話に登場する女性がマグダラのマリアだ。ペテロは嫉妬している」

「イエスがマグダラのマリアを偏愛しているから？」

「それだけではない。愛情よりも利害の問題のほうがはるかに大きかったのだよ。福音書に記されたこの時点で、イエスは自分がまもなく捕らえられ、処刑されると察していた。だから、死後にどう教会を運営していくべきかをマグダラのマリアに伝えている。そのため、ペテロは女性の下の地位に甘んじるとして、不満をあらわにしたわけだ。女性差別の傾向があったのかもしれない」

このような会話がソフィーとテーピングの間で交わされている。これは「マリアによる福音書」と呼ばれる「ナグ・ハマディ文書」(Nag Hammadi Codices)の一つからの引用である。

「ナグ・ハマディ文書」とは、一九四五年十二月、エジプト南部に位置するナイル河畔の町ナグ・ハマディ付近で、アラブ人の一農夫によって発見された、十三冊のコーデックス(古写本)に含まれる五十二のバピルス文書のことである。これらの文書はすべてコプト語(古代末期のエジプト語)で記されているが、そのほとんどすべてがギリシア語からコプト語への翻訳と想定されている。ナグ・ハマディ文書と同じ頃に死海の西北岸クムランで「死海文書」が発見されたが、似たような扱われ方をしている。この中に「マリアによる福音書」という欠損が大きい文書がある。ダン・ブラウンはそれをソフィーに読ませ、テーピングに説明させ、読者を圧倒しようとする。対応部分を日本語訳で紹介する。

ペトロが答えて、これらの事柄について話した。彼は救い



主について彼らに尋ねた、「(まさかと思うが) 彼がわれわれに隠れて一人の女性と、(しかも) 公開ではなく語ったりしたのだろうか。将来は、われわれは自身が輪になって、皆、彼女の言うことを聴くことにならないだろうか。(救い主) が彼女を選ん(へだ) というのは、われわれ以上になのか」。

【一八】そのとき、「マ」リヤは泣いて、ペトロに言った、「私の兄弟ペトロよ、それではあなたが考えておられることは何ですか。私が考えたことは、私の心の中で私一人で(考え出) したことと、あるいは私が嘘をついている(とすればそれ) は救い主についてだと考えておられるからには」。

レビが答えて、ペトロに言った、「ペトロよ、いつもあなたは怒る人だ。今私があるあなたを見ている(と)、あなたがこの女性に対して格闘しているのは敵対者たちのやり方だ。もし、救い主が彼女をふさわしいものとしたのなら、彼女を拒否しているからには、あなた自身は一体何者なのか。確かに救い主は彼女をしつかりと知っていて、このゆえにわれわれよりも彼女を愛したのだ。むしろ、われわれは恥じ入るべきであり、完全なる人間を着て、彼がわれわれに命じたそのやり方で、自分のために(完全なる人間) を生み出すべきであり、福音を宣べるべきである、救い主が言ったことを越えて、他の定めや他の法を置いたりすることなく」

訳本からも微妙にニュアンス・内容が異なることに気づくだろう。また、学術的には「マリアによる福音書」には「救い主」という言葉は出てくるが、一貫して「イエス」という名前が出てこないことも注目を集める部分であるという。「ナグ・ハマディ文書」には、グノーシス的なものが多いといわれる。○六年四月「ユダの福音書 写本」だった」というタイトルで朝日新聞に掲載された記事がある。それは、イエス・キリストを処刑されるよう引き渡した「裏切り者」として聖書で描かれてきた「イスカリオテのユダ」が師と秘密裏に交わした会話録とされ、ユダの行為が、実はイエスの一番弟子として本人の依頼に従い、「救済」を完成させる役目を負った善行だったと主張しているというものであった。ナショナル・ジオグラフィック協会の依頼を受けた顧問委員会のメンバー、クレイグ・エバンズ(新約聖書学) は朝日新聞に対し、「この福音書が描くイエス像は異端とされた『グノーシス派』の信仰に基づくもので、歴史的な事実を反映しているとは私は考えない。だが、ユダの人物像については新たな材料を提供する重要な文献だ」と語った、とある。一七〇〇年前のパピルスに書かれたこれもグノーシス文書の一つであろう。

ただ、遠藤周作は小説『イエスの生涯』の中で「ユダ、哀しき男」として三〇年以上前にユダを一番弟的に書いている。新学的学者田川建三による痛烈な批判はあるが。

⑤ マグダラのマリアについての検証

『ダ・ヴィンチ・コード』(下) 二八ページで

「その名が教会によって禁句とされたために、マグダラのマリアはさまざまな変名でひそかに表されるようになった。杯、聖杯、薔薇などだ」

と断定している。この話は、あまりにもばかっている。キリスト教では古くから、洗礼名をマリア・マグダレナ(マグダラの)とすることは広く行われている。「杯」、「聖杯」、「薔薇」という言葉をマグダラのマリアと結びつけるという事実はない。マグダラのマリアに関しては、キャサリン・R・ジャンセン(アメリカ・カトリック大学歴史学専攻)がインタビューで

わたし自身は、マグダラのマリアの最も重要な役割は、イエスの復活を最初に目撃したことだと思います。この瞬間に彼女は、中世の聖書注解者が名づけた「使徒アポストローム・カステラの使徒アポストローム・カステラ」になるのです。

と語っていることで十分ではないのだろうか。

⑥ Q資料についての検証

『ダ・ヴィンチ・コード』(下) 三二ページで所謂Q資料について

「(Q資料は) おそらくイエス直筆のものだろうと言われている」

と言っている。D・ツェラーの「Qは研究仮説でしかない(『Q資料注解』一三ページ 教文館) でばっさり結論が出るのだが、若干補足しておく。Qはドイツ語の「資料、出典」の頭文字を取ってつけられた。だが、実物を目にした人はだれもない。というのは、この仮説は資料の発見に基づくのではなく、マタイとルカの福音書には、マルコにはない共通の文章や言葉が含まれている、という事実から発展したのである。それを「おそらくイエス直筆のものだろうと言われている」と、有無を言わず一方的に断定している。これも「事実」というのだから啞然とさせられる。

(3) シオン修道会の検証

『ダ・ヴィンチ・コード』という作品を支える最も重要な存在として「シオン修道会」という秘密結社がある。「シオン修道会」についての言及の中からいくつか上げてみる。

「ミスター・ソニエールはある秘密結社の会員だったと、わたしは確信している。非常に長い歴史を持つ、隠密の友愛組織だ」

「彼らはプリウレ・ド・シオン—シオン修道会と自称している。ここフランスに拠点を置き、ヨーロッパ全土から傑出した人材を集めている。地上最古の秘密結社のひとつだと言っている」

「そこには、サー・アイザック・ニュートン、ボッティチエリ、ヴィクトル・ユゴー、そしてレオナルド・ダ・ヴィンチらの名が含まれている」

『ダ・ヴィンチ・コード』では、シオン修道会は一〇九九年にゴドフロワ・ド・ブイヨンによってエルサレムで創設された友愛組織ということになっている。創立以来、女神崇拜を守り、テンブル騎士団がソロモン神殿を掘り返して見つけた遺物や秘密文書を保管してきた。シオン修道会の歴代総長には、偉大な芸術家や権力者が名を連ねていると教えてくれる。結婚したマグダラのマリヤとイエス・キリストの子孫の血脈の秘密を、ある時まで守り抜くのが任務だともいう。オンラインシヨップ・アマゾンの投稿欄を読むまでもなく、読者の中には、キリスト教に対する考え方が変わったとか、(カトリック)教会の教えは、「真実を隠蔽(いんぺい)するための人類史上最大の陰謀」ではないかと思ってしまう人も当然いるはずである。キリスト教信者にとっては、これまでの価値観が百八十度変わるような非常に大きな問題である。これからその「シオン修道会」について検証していきたい。

シオン修道会は一九五六年突然見つかった「秘密文書」とともに、二〇世紀の世界に現れている。一九八一年にはピエール・プラントールという人物が総長に就任。自らがメロヴィング王家の血筋であると主張し、重要な秘密を保有しているとほめかしていた。しかし、この修道会についてのほとんどの情報は、プラントールによる「漏洩(ろうえい)」。現在では、単に彼が王位継承権を正統化するために画策したと考えられている。最近、一八世紀にその創設時期を修正したという。そもそもシオン修道会なる団体は、一九五六年に見つかる以前の史料にはまったく登場しない。つまり、歴代の総長云々は「でっちあげ」なのである。ダ・ヴィンチが秘密結社に所属していた、という論拠も何もないのである。作品中「秘密文書」と呼ばれるものがしばしば出てくるが、現在ではそれが捏造されたものだという見方が強い。

『薔薇の名前』の著者、哲学者で記号論の第一人者であるウンベルト・エーコは、ヘイエスとマリア、そしてダ・ヴィンチ（ダン・ブラウンの説を検証するABCニュースの特別番組）の取材に対し、次のように語っている。

『ダ・ヴィンチ・コード』が根拠としているのは十九世紀のおとぎ話であり、ピノキオや赤ずきんと変わりはない——つまり、世界は平面だと信じるのと同じくらい「誤った説」である。

それでは、ダン・ブラウンは何を根拠に、滔々とシオン修道会について自信を持って述べているのだろうか。それはすべて、『レンヌルリシャトーの謎』という奇妙な本に起因する。

そしてこの中に、前半Iで述べた『シオンの賢者の議定書』についても書かれているのである。

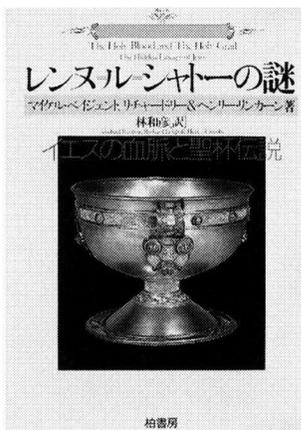
III 『シオンの賢者の議定書』、『ダ・ヴィンチ・コード』その底流の考察

海外でベストセラーになったからか、『ダ・ヴィンチ・コード』絶賛本も店頭に溢れかえっている。その中の一冊『ダ・ヴィンチ・コード』の謎を解く』には、シオン修道会について次のように書かれている。

シオン修道会の歴代ナヴィゲイターは特定の家族の血脈に沿ってリーダーシップを譲渡する暗黙の了解があったが、後にこの地位は影響力の強い芸術家、科学者などのヨーロッパ史に刻まれた才人たちにも受け継がれている。

『ドーシアーズ・シークレッツ』に記された一九五六年付けのそのリストには、本書の「シオン修道会歴代総長」の項で列記したように、数々の高名な人物の名前が登場する。レオナルド・ダ・ヴィンチ、アイザック・ニュートン、ヴィクトル・ユゴー、そして一九一八年から一九六三年まで総長職を務めたとされるジャン・コクトーなど。

一九六一年に死去したジャン・コクトーの後を継いでシオン修道会総長に就任したのが実際に誰なのかははっきりしていないが、最終的に襲名したのは、一九八四年に辞任するまでこの組織の主任渉外担当を務めたビエール・プランタールである。



『レンヌルリシャトーの謎』

ナヴィゲイターに就任していた間、プランタールは一九八二年に発刊された世界的ベストセラー『レンヌルシヤターの謎：イエスの血脈と聖杯伝説』の中心的な情報提供者となり、同書を執筆した著者たちと直に接触した。同書は、英語圏の人々にシオン修道会の物語への興味をかき立てた画期的な本でもある。

このような「御用」本を出版する出版社の良識も問われると思うが、ここで述べている『レンヌルシヤターの謎—イエスの血脈と聖杯伝説』こそ、明らかに『ダ・ヴィンチ・コード』のシオン修道会に関する部分のタネ本なのである。この本は、マイケル・ベイジエント (Michael Baigent)、リチャード・リー (Richard Leigh)、ヘンリー・リンカーン (Henry Lincoln) の共著でフランスの小さな村レンヌル・シヤターについての本である。ダン・ブラウンは、この本に敬意を表したのか、リチャード・リーの苗字リーを、マイケル・ベイジエントからは苗字のアナグラムでサー・リー・テーピングという登場人物の名を作り出している。また、『レンヌルシヤターの謎』はベランジュ・ソニエールという司祭の伝記が中心になっているが、ジャック・ソニエールはこれをヒントにしたものである。『ダ・ヴィンチ・コード』同様、この本も論拠を示さずに読者のこれまでの常識を根底から覆すような事柄が延々と書かれている。また、『プロトコル』についても述べている。『レンヌルシヤターの謎』を数箇所検証してみる。

一 『レンヌルシヤターの謎』の検証

(1) 『プロトコル』についての言及部分 (二二三ページ～二三四ページ)

現代の学者は、これは完全な偽物で、ユダヤ教の信用を失墜させるため、反ユダヤ主義者が捏造したばかばかしい文書と片づけている。しかし、この『議定書』は、そのような結論とは真つ向から矛盾している。たとえば、この内容には、明らかにユダヤ的でない不可解な言及がいくつも見られるが、その言及はあまりにユダヤ的でないのが明らかなので、逆にだれかがつくりだしたとも考えにくい。わずかでも知識があれば、ユダヤ教の信用を落とすために、このような言及を反ユダヤ主義者が捏造するとは考えられない。なぜなら、これに述べられている内容がユダヤ教に由来するとは、だれも信じないからである。

今日のユダヤ人と同じように、一八九七年のユダヤ人にとっても王の概念は意味をなさず、このような現実を知らない捏

造者がいるとは考えられない。実際、ここで引用した言及はユダヤ的というよりはキリスト教的なものである。この二千年間、「ユダヤ人の王」はイエス以外はおらず、福音書によれば、イエスは「ダビデ王朝の末裔」である。もしだれかがこの文書を捏造してユダヤ人の謀略のせいにするつもりならば、どうしてこのように明らかにキリスト教を匂わせるようなことを書いたのだろう。どうして教皇というキリスト教に特有の概念について触れたのだろう。どうして「世界中の教会」ではなく、世界中のシナゴークや神殿にしなかったのだろう。

この『議定書』が本当に反ユダヤ主義的な思想で書かれたとすれば、これを書いた宣伝者は実に未熟で無知といわざるをえない。

要するに、反ユダヤ主義者による捏造だったなら、もつと巧妙にするはずであるということを中心を主張している。すでにわれわれは、『プロトコル』の成立経緯についてはほぼ確実なものを把握したが、『レンヌルルシヤトの謎』では、フリーメイソンの組織かフリーメイソンの志向をもつ「シオン」という言葉を含む秘密結社によって発行されたとい根拠なしに断定する（これは、ダン・ブラウンと同じやり方だが）。

出版された『議定書』は完全な贋作ではなく、むしろ過激に修正されたものであるという。そしてその秘密結社こそが、プリウレ・ド・シオン—シオン修道会であるとする。

ここで、『ダ・ヴィンチ・コード』と『シオンの賢者のプロトコル』が『レンヌルルシヤトの謎』を媒介にして繋がってくるのである。

(2) シオン修道会、マグダラのマリア等についての言及内容

三五六ページあたりからシオン修道会やマグダラのマリアとイエス・キリストの子孫を扱い、その血脈がどのようにして今日まで伝わったのかということ語っている。だが、その論拠は何も明らかにされず、ただ偉大な秘密を語るかのように荘厳な調



レンヌ・ル・シャトー周辺

子で書き進められている。そこではイエスは貴族階級とされ、マグダラのマリヤも社会的に同じ地位の人間と考えるのが当然としてゐる。シオン修道会は現在までその秘密を守り続けてきた秘密結社だという。語り口といい、根拠のなさといい、まるで『ダ・ヴィンチ・コード』のようである。というより、『ダ・ヴィンチ・コード』がそれを参考にしたと言うのが正確であろう。「それを示す証拠が二十年余り前にパリのフランス国立図書館で見えられ、『秘密文書』として知られることになった」とダン・ブラウンは言っている。その「秘密文書」は「4ℓm249」という分類番号」と語っている。では、学術的にこれらについてはどう考えられているのだろうか。結論的なことを示したい。

二 『レンヌル＝シャトーの謎』の真贋について

まともな歴史学者はこの「秘密文書」に取り合っていない。つまり信頼できる資料ではなく、単なるタイプで打たれた紙の束で何の価値もないとされている。たとえば、「秘密文書」には歴代総長の目録が含まれている。最後の総長は、ピエール・プラントールという人物で、そのすぐ前には、ジャン・コクトーが一九六二年に死ぬまで総長を努めたとされる。だが、一九五六年に提出された同修道会定款にはコクトーの署名はなく、あるのは「ジャン・ヴァン工場で製図工として働く」ピエール・プラントールの署名である。

シオン修道会をめぐっては、とんでもない思想や要求の目白押しである。非合理主義、秘教主義、正統王朝主義、反ユダヤ主義、社会的に認められたいという思い等々。これらはすべて、ピエール・プラントールという一人の人間の妄想であり、プラントールは、自分がメロヴィング朝の末裔だと主張し、信任を得ただけだと言っている。それも後日、九〇年頃になって直系という説を翻した。しかも「秘密文書」の著者であるフィリップ・トスカンという人物が、LSDを服用して著作したのだと非難し始めた。実際にその人物は逮捕されているという。別の事件で取調べを受けていたプラントールは、判事の前ですべて作り話だったことを証言し、二〇〇二年に亡くなっている。

結局、シオン修道会は、一人の社会不適応者の誇大妄想が作りあげた狂言だった。その狂言は、それを事実祭りに祭り上げて大儲けを考える人々のおかげで世に知られることになったのである。

三 エピローグ

でつちあげとか嘘は十分に大がかりで大胆でさえあれば疑う余地のない事実に変化し得るとハンナ・アーレントは指摘している。『シオンの賢者の議定書』も『ダ・ヴィンチ・コード』も双方とも（『レンヌルリシャトーの謎』も）狙いは同一方向を向いている。すなわち、これまで知られていた歴史は欺瞞であつて、その背景には実は真の支配力が働いている、それが世界を欺くために歴史を利用しているというスタンスである。それは誇大妄想的な仮設をたて、論拠なしに、有無を言わせず、次々に断定していくやり方を取り、歴史を意のままに変えようとする。ナチが初めて『シオンの賢者の議定書』を利用したのでもない。ダン・ブラウンが初めてシオン修道会に目を向けたわけでもない。（第一次大）戦後ドイツでは『プロトコル』は何十万部と印刷され、ありとあらゆる政党や団体に買いとられていた。

「将来のわれらの政治家、外交官諸氏は、支配技術のABCを学ぶために東方の大悪党先生に弟子入りせねばならぬだろう。『シオンの賢者の議定書』はそのための素晴らしい予備教育を与えてくれる」とまで言われていた。『プロトコル』の異常なまでの人気は、大衆のユダヤ人憎悪からではなく、むしろユダヤ人への賛嘆と、彼らから学びたいという願いだつたとハンナ・アーレントは鋭く指摘している。大衆のその心理をナチは発見したのである。ヒトラーの「ドイツ民族を益することはすべて正しい」という言葉は、議定書の「ユダヤ人を益することはすべて道德的かつ神聖である」という句を書き換えたものである。ヒトラーは『プロトコル』を偽書だと見抜いていた。また、大衆はヒトラーの犯罪性をうすうす見抜いていたが、それによってヒトラー体制の支持は少しも弱まらなかつた。その支持は無知からくるのも洗脳からくるものでもない。「ユダヤ人を憎むのにユダヤ人を全く必要としない。これこそが二十世紀の反ユダヤ主義の特徴だ」とアーレントは指摘したことを再度述べておきたい。

偽書、偽説について、思想的な観点から論じてきた。ヒトラーは『プロトコル』が偽書だと知りながら、大いに利用した。ダン・ブラウンが『レンヌルリシャトーの謎』の内容を信じつつ題材としたのか、偽書と知りながら利用したのかは分からない。ただ、陰謀、秘密結社、秘密文書等々を、権力と狡知を利用して歴史を捏造しようとする人間も、それが贗物とうすうす知りつつ賛嘆の声をあげる大衆にも、共通のことが言えるのではないか。疑いつつも信じなくては社会が成り立たない、ヒューマニズムを否定する行為であるということ。

最近の研究では悪名高いゲシュタポ（Geheime Staatspolizei 秘密国家警察）の職員数は、予想よりはるかに少なく、いたるところで監視の目を光らせていたのは、ゲシュタポではなく、大衆の密告が、ゲシュタポを機能させていたという。

疑いつつも信じなくては社会が成り立たない、ヒューマニズムを否定する。もつとも、そういう意識が喪失した人間のことを「大衆」というとオルテガは定義しているのだが。

参考文献

- (一) 「全体主義の起源3」(ハンナ・アーレント 一九七四年 みすず書房)
- (二) 「イェルサレムのアイヒマン」(ハンナ・アーレント 一九六九年 みすず書房)
- (三) 「ハンナ・アーレント」(太田哲男 二〇〇三年 清水書院)
- (四) 「敗戦後論」[語り口の問題] (加藤典洋 二〇〇五年 ちくま文庫)
- (五) 「アメリカの反知性主義」(リチャード・ホーフスタッター 二〇〇三年 みすず書房)
- (六) 「ナグ・ハマデイ文書Ⅱ福音書」(荒井猷・大貫隆・小林稔・筒井賢治 一九九八年 岩波書店)
- (七) 「旧約聖書外典(下)」(関根正雄 一九九九年 講談社文芸文庫)
- (八) 「教会史入門」(曾根晩彦 二〇〇一年 日本基督教団)
- (九) 「Q資料注解」(D・ツェラー 二〇〇〇年 教文館)
- (一〇) 「ユダヤ人世界征服陰謀の神話」(ノーマン・コーン 一九八六年 ダイナミックセラーズ)
- (一一) 「ユダヤ人陰謀説」(デイヴィッド・グッドマン、宮澤正典 一九九九年 講談社)
- (一二) 「過越しの祭」(米谷ふみ子 二〇〇二年 岩波現代文庫)
- (一三) 「イメージを読む」(若菜みどり 一九九三年 筑摩書房)
- (一四) 「エルサレムは誰のものか」(平山健太郎 一九九二年 NHK出版)
- (一五) 「ダ・ヴィンチ・コード(上)」(ダン・ブラウン 二〇〇四年 角川書店)
- (一六) 「ダ・ヴィンチ・コード(下)」(ダン・ブラウン 二〇〇四年 角川書店)
- (一七) 「THE DA VINCI CODE」(DAN BROWN 二〇〇四年 DOUBLEDAY)
- (一八) 「ダ・ヴィンチ・コードの謎を解く」(サイモン・コックス 二〇〇五年 PHP研究所)
- (一九) 「ダ・ヴィンチの暗号」(田辺清 二〇〇五年 宝島社)
- (二〇) 「ダ・ヴィンチ・コードの「真実」」(ダン・バINSTAイン 二〇〇五年 竹書房)
- (二一) 「ダ・ヴィンチの暗号を解説する」(中見利男 二〇〇五年 日本文芸社)

- (二二) 『反』ダ・ヴィンチ・コード』(ホセ・アントニオ・ウリャテ・ファボ 二〇〇六年 早川書房)
 - (二三) 『ユダヤが解ると世界が見えてくる』(宇野正美 一九八七年 徳間書店)
 - (二四) 『ユダヤが解ると日本が見えてくる』(宇野正美 一九八七年 徳間書店)
 - (二五) 『歴史読本特集 世界謎のユダヤ』(一九八七年 新人物往来社)
 - (二六) 『レンヌルリシヤトの謎』(M・ベイジェント、R・リー、H・リンカーン 一九九七年 竹書房)
 - (二七) 『イエスの生涯』(遠藤周作 一九八二年 新潮文庫)
 - (二八) 『わが闘争(上)』(アドルフ・ヒトラー 一九七三年 角川文庫)
 - (二九) 『シオン長老の議定書』(四王天延孝 二〇〇四年 成甲書房)
 - (三〇) 『ロンギヌスの槍』(トレヴァ・レヴンスクロフト 二〇〇二年 学研M文庫)
 - (三一) 『ユダヤ製国家日本』(ラビ・M・トケイヤー 徳間書店)
 - (三二) 『ユダヤを知る事典』(滝川義人 二〇〇五年 東京堂出版)
 - (三三) 『朝日新聞縮刷版』
 - (三四) 『マキアヴェッリ全集2 デイスコルシ』(一九九九年 筑摩書房)
 - (三五) 『君主論』(池田廉訳 二〇〇一年 中央公論新社)
- (補注) 『プロトコル』がマキアヴェッリの口を借りた形で述べていると書いたが、ここで、マキアヴェッリの「名譽」のために参考文献(三五)から一箇所、以下のことを引用しておきたい(二三八ページ)。すなわち、「目的のためには手段を選ばない」という所謂マキアヴェッリズムの象徴的言葉についてである。

(この言葉は)マキアヴェッリズムを象徴したものととして、重視されてきた。だが、後世曲解されたような意味はここにはない。すなわち、意図と結果、目的と手段という厳密な二項を論議の対象にしたものではなく、そのどちらかの優位性を論じたものでもない。むしろ民衆心理の面から、為政者の行動と結果を粗上にしたのせ、ある状況では、不道徳な、非情な行為を許されると説いている。ある状況とは主に建国の時などの、緊急事態を想定していると思われる。「たとえその行為が非難されるようなものでも、もたらした結果さえよければ、それで構わないのだ。ロムロスの例のように、結果がrippばであれば、つねにその行為はかならず許されよう」(『デイスコルシ』第一卷第九章)。

- (三六) 『大衆の反逆』(神吉敬三訳 一九九五年 筑摩学芸文庫)
- (三七) 『オルテガ 大衆の反逆』(寺田和夫訳 二〇〇二年 中央公論新社)
- (三八) 『ナチズムの時代』(山本秀行 一九九八年 山川出版社)

(三九) 『ナシヨナルジオグラフィック ユダの福音書を追う』(二〇〇六年五月号 日経ナシヨナルジオグラフィック社)

(四〇) 『ユダの福音書を追え』(ハーバート・クロスニー 二〇〇六年 日経ナシヨナルジオグラフィック社)

(補注) (三九)(四〇)から、『ユダの福音書 写本』について簡単に説明を加えておきたい。

エジプトのカイロの南方一五〇キロ、ミニヤール県あたり(ナグ・ハマディの北約二八〇キロ)で一九八〇年代初めに三点のコーデックス(冊子)が発見され、古美術商に売りに出された。発見された正確な場所、時期については、関係者は口をつぐんだままだという。二〇年近くの間、盗難にあつたりしながら転々と動き、ロングアイランドの銀行貸金庫におかれた文書は劣化が進んだ。最終的に二〇〇一年二月スイスの古美術商フリーダ・エヌバーガー・チャコスを経て、古美術専門財団とナシヨナルジオグラフィック協会と契約が交わされ、二〇〇六年六月に『ユダの福音書 写本』が出版されることになった。

『ユダの福音書 写本』に書かれている(イスカリオテの)ユダは、イエスの特別な使命を与えられた「十三番目の聖霊」という位置づけである。後世、非難の的となり罵られることを承知で、イエスの生を終わらせるためにその肉体を引き渡したのだと書かれている。崇拜する師の意向に従つてである。

『ヨハネの福音書』に書かれているユダ像から推測できる範囲だという説もあるが、『フィリポの福音書』、『トマスの福音書』、『マリアの福音書』等々と同様、グノーシス文書であることがよく分かる。

(四一) 『ダ・ヴィンチ・コード その真実性を問う』(ハンク・ハネグラフ、ポール・マイアー 二〇〇六年 いのちのことは社)

(補注) 本紀要原稿の初出形は〇六年四月中旬だった。その時点では(四二)のような本は(三二)以外はほとんどなかったが、五月に出版された(四二)第一節には本紀要で述べたような内容が多く書かれている。ただ、第二節の内容は「真実」についての論考であり、キリスト教徒以外には難しい部分が多い。

(四二) 『宗教批判をめぐる』(田川建三 二〇〇六年 洋泉社)

1 ロンドン生まれ。オックスフォード大学卒。サセックス大学教授。集団精神病理学研究センター所長。主な著書に、『魔女狩りの社会史』(岩波書店)等。

2 (一九〇六一―一九七五)ドイツのハノーファー近郊リンデンでユダヤ系の家庭で生まれる。アメリカに亡命後、パークレー、シカゴ、プリンストン、コロンビア各大学の教授、客員教授を歴任。『全体主義の起源』等著書多数。ハンナ・アーレントについては後にまた述べる。

3 四王天延孝(一八七八―一九六二)フランスに第一次大戦の観戦武官として派遣されて、反ユダヤ主義に接する。以後反ユダヤ主義を唱える。一九四二年翼賛選挙で衆議院議員。戦後はA級戦犯となるが、釈放。著書多数。

4 六六六という数字については、『ダ・ヴィンチ・コード』で「悪魔の数字」としてダン・ブラウンはルーヴル美術館入り口のピラミッドのガラスの敷に關

連して述べている(ただしルーヴル美術館公式サイトでは実際には六七三枚)。

- 5 旗幟・旗じるし。
- 6 賢哲・知識が深く道理に通じている人。
- 7 四王天は非ユダヤ人の複数形「ゴイム」を用いている。
- 8 あの「オウム真理教」を思わせる。
- 9 拘泥・こだわること。
- 10 シオンの賢者が既に絶対的権力を持っているといった舌の根も乾かぬうちに、権力奪取までにはあと一世紀待たねばならぬなどと書かれている。異邦人の政府は賢者に対する恐怖におののいているといつてみたかと思うと、その政府は賢者の策動に全く気づいていないと言ったりしている。
- 11 ド・シオンという名からラチコフスキーが「シオンの賢者の議定書」と題したという説、「世界シオニスト会議」からヒントを得たという説等がある。
- 12 一部を紹介しておく。「既に確言した通り、文明の進歩はキリスト教徒を理性の支配下に服従させた。これこそが我々の専制の根拠なのだ。理性の名において我々は厳正に鎮圧し、すべての制度から自由主義を根こそぎにすることができるのである」
- 13 ジョリがマキアヴェリがしゃべったという形をとったものを、シオンの賢者と称する匿名の演説者の言葉にすりかえている。
- 14 悖徳・道徳にそむくこと。「背徳」は代用表記。
- 15 mob・暴徒。
- 16 フリーメイソン (Freemason) 一七二七年ロンドンで結成されたとされる博愛主義的な自由主義者の会員制団体。一三六〇年のギルド説等もあるが、今紀要では詳しくは触れない。
- 17 The Priory of Sion—a European secret society founded in 1099—is a real organization. In 1975 Paris's Bibliothèque Nationale discovered parchments known as Les Dossiers Secrets, identifying numerous members of the Priory of Sion, including Sir Isaac Newton, Botticelli, Victor Hugo, and Leonardo da Vinci.
- 18 All descriptions of artwork, architecture, documents, and secret rituals in this novel are accurate.
- 19 「エホバの証人」、「モルモン経(教)」もほぼ同様の見解である。
- 20 マルマリカ司教テオナスとプトレマイス司教セクンドゥス
- 21 エレミア書：一六一—主の言葉がわたしに臨んだ。「あなたはこのところで妻をめとってはならない。息子や娘を得てはならない。」
- 22 グノーシスについては今紀要では扱わない。いつか詳しく触れたいと考えている。
- 23 前一七〇年ごろの筆者、年代の異なる多くの文書もしくは集大成で、クムラン第四洞窟で写本の断片が発見されている。
- 24 「ドイツ反ユダヤ主義の長老」テオドル・フリツチェの言葉。